



戦争をさせない、憲法九条は素晴らしい!

かつての戦争を忘れてはいけない

57才 男性

かつて、日本は中国とそしてハワイ真珠湾攻撃に端を発してアメリカ・イギリスと戦争を始めます。これが太平洋戦争とも大東亜戦争ともいわれる先の大戦です。最初はフィリピン、インドネシア、ビルマ、マレー半島、ベトナム、南西太平洋諸島を占領し、優勢でしたが、その後連合国側の反攻を受け戦局が不利になってゆく。1944年サイパン陥落以降戦線濃厚に、そしてアメリカ空軍による本土爆撃が始まったのはその年の末のことである。そして翌年1945年4月に沖縄本島に上陸され、8月には広島・長崎に世界で初めて原爆が使用され甚大な犠牲者を出し、ソ連軍が中立条約を無視して満州に侵入し満身創痍となった日本は連合国側の日本への無条件降伏を勧告するポツダム宣言を受諾。8月15日に降伏した。そして1946年11月3日マッカーサー元帥を最高司令官とする連合軍最高司令部（GHQ）は過去の侵略戦争を反省し、軍国主義的ではない平和で民主主義の日本にふさわしい憲法を作成することを指示した。しかし時の政府が考えた新憲法の内容たるは旧憲法の域を出ていない古色蒼然としたものであった。そこでGHQは改めて新憲法の草案をつくり、国会で審議をへて現在の日本国憲法が公布されたのである。1947年5月3日に施行されたその内容たるや国際社会に誇れる内容です。この憲法を守ることが先の大戦で多くの人々の尊い命を犠牲にし、多くの物を犠牲にした日本の責務と思います。

二律背反の時代を生き続け今日という日を迎えている。そして大人20才として戦争を体験したものが国民の5パーセントを切っている現在、貴重な生き残りの一人として、残された人生を誇り高く意義深く送りたいと心から願ひ、憲法九条を守る西山の会に参加し、勿論微力ではあるが、此の会の活動に力を添えながら過ごしている。

私は1944年敗戦前1年余、祖国：民族のため、一命を捧げる覚悟で海軍予備学生を志願した。そして、その当時ごく自然に、やがて水中特攻隊員として、真珠湾奇襲に参加した特殊潜航艇の搭乗員としての路を歩むこととなるのである。しかし特攻のための厳しい訓練が始まった以降、時間がたてばたつ程私の忠君愛国、七生報国、見敵必殺の精神構造は、徐々に内部矛盾を露呈し、崩壊の途を歩み始めた。それはレイテ、サイパン、沖縄戦を連戦連敗の帝国海軍にはすでに戦艦、空母は皆無に等しく、連合艦隊は陸上に本部を移している現状であり、したがって、貴様たちの蛟竜が海軍の中心戦力である、という教官たちの率直な状況説明によって「この戦争は負けだ」という認識が隊員の一般的な見方になりつつあった。そして私ももちろん例外ではなかった。「圧倒的なアメリカ軍に、わずかな数の蛟竜で体当たりしてみても、戦局の転換ははかられるのだろうか。それにもかかわらず、あえて出撃することは、まさに単なる自殺行為に等しいのではないだろうか。まったく無益な死に方はしたくない。おれはまだ20歳でしかないではないか」という悩みが心の中に囁き始めたのである。畢竟するに「死」が怖くなったのかもしれない。このような葛藤がこうい終戦直前まで眠れない夜に悩まされ続けた。しかしわたしは特攻隊志願を求められた際に金子治太郎中尉（教官）の「やけっぱちはだめだ、冷静に考えて志願の賛否をきめろ」を思い出しながら「じたばたするな、みんな同じ悩み苦しんでいるはず」だと思ふようになったら不思議によく眠れるようになっていた。終戦後入隊から除隊

憲法9条「非武装」・「戦争放棄」は平和の原点

幹事 山田 信

私は1925年「大正」14年生まれ、やがて87才である。全体主義：軍国主義：戦争と戦後の混乱 それに続く繁栄、平和自由主義、まさに

するまでずーっと一緒に最も親しかったMに私の死への悩みを話し「貴様はどうだった」と尋ねたところ、彼は「そんなこと当然だ」と吐き捨てるように言い放った。私は青春時代の、あの貴重な体験、「海軍特攻」の評価を明らかにする責任があると思う。祖国、民族のため、一身を捧げて特攻に参加し、軍神とまで賞された3000余人の先輩たちは少なくとも体当たりのレバーを引く、その瞬間まで「祖国必勝を信じ、天皇陛下万歳！日本国万歳と叫びながら突入したに違いない。しかし敗戦後にいたって軍国主義の批判と併せて「特攻など大死」という論評まで公にされる時代を迎えることとなり、誠に残念至極である。特攻死の先輩に衷心からお詫びしなければならないと思う。だが自らの過去を冷静に振り返るとき「戦争のため命をすてることを決意するよりも」「戦争反対のために命を捧げることのほうがよほど人間的である」これが私の死に對峙し続けた三ヶ月間の後に達した悟りである。私は、今でも眠れない夜に、特攻時代を回顧し、特攻に命を捧げた先輩各位の心情に思いをいたし、枕をぬらしていることを、ここに白状しなければならぬ。

ところで、10数年前から、世界に冠たる日本国憲法改正の動きが生まれ、いまや、戦力の保持、自衛戦争の明確化を中心とした改憲案を、政権公約として選挙を戦い、最近はよりウルトラ右翼と目される党派が、国民の予想外の人気を得るなど、改憲への動きが顕在化している。これは戦争を知らない60才前半までの国民が90パーセントを超え、従って国民のリーダーたるべき政治家、国会議員の中枢が戦争未体験者であるという構造的な原因にもよるが、今こそ戦争体験者が前に出て、戦争の愚かさ、平和の尊さを勇気を持って語り、憲法9条の真意とそれを守ることの大切さを積極的に訴えなければならぬ。まさに、これからの戦争は核ミサイルの戦争である。換言すればミサイル発射ボタンの押し合いにより双方とも国土は崩壊し、国民は全滅に近い打撃を受け

る。勝ち負けでなく、崩壊と全滅が保証されるのみである。このような愚かなことは絶対に避けねばならない。このためには、非武装：戦争放棄の旗を高らかに掲げる「憲法9条を守る」国民運動の果たす役割は極めて大きいと言わざるを得ず、「憲法を守る会」の使命は誠に重要である。然し「世界には北朝鮮のようなならずものがいる、彼らが侵入してきた場合無手かつすまされるのか、だからそのためにこそ武力が必要であり、軍隊を持たねばならない。」これが改憲側の主張である。この理念による政治指導によって、実は軍拡競争がはじまり、それが世界戦争にまで進み、2000万を超える犠牲者が生じたことを決して忘れてはならない。日本には世界第3位といわれる自衛隊が存在し、戦争をしない国から戦争ができる国へと憲法9条の解釈を変質させてきた結果だと思ふ。しかし、日本が戦後60数年間に渡り、きなくさい場面に幾度か遭遇したこともあったが、外国との戦争に加わらなかつたのは、多くの国民の声で憲法第9条を残してきたからである。我々は、去る大戦で、アメリカが上陸する前に、ポツダム宣言を受け入れたので、国の、国民の今日がある。崩壊と全滅を選択することだけは避けねばならない。9条の道は困難で険しいにちがいないが、人類が求める平和の世界を実現するため、この道を、この栄光の道をあえて選ぶのではないか。日米安保条約及び自衛隊に賛成の方も含めて「不戦の誓い憲法第9条」だけは絶対的なくてはならないという声を大きくしていただきたいことを切に願っています。

皆さんどうか力をかしてください。九条を守る西山の会に入会くださいませんか。お待ちしております。